

9. 人生いろいろ、家族もいろいろ

「明日が見えますか」

～女性の貧困と社会的養護の子どもたちのこと、一緒に考えてみませんか～

ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

代表 田坂 成生

1. 事業目的

親による虐待や不慮の妊娠によって家族の中で育つことが難しい「社会的養護」が必要な子どもたちが増えている。複数の仕事を掛け持ちしなければ生活できないシングル女性、ワーキングプアの若者も多い。その現実を多くの人に知ってもらい、どのような支援が必要なのかを考える契機にする。年齢や性別、職業、立場にとらわれない多様性のある生き方を認め合う包摂的な社会の実現するため、公的な政策への提言、支え合う地域社会の再構築について議論を深めることを目指す。

2. 事業内容

「社会的養護」「シングルマザー」「生活困窮」等をテーマに、当事者・支援者双方の視点から講演会を開催し、参加者全員で議論の機会をもった。

【第1部】 ～シングルマザー・生活困窮家庭のこどもとして生きて～

登壇者：Aさん（社会的養護・セクシャルマイノリティ当事者）

進行：白井千晶さん（静岡大学教授）

（登壇予定だった田中志保さんはインフルエンザのため欠席）

【第2部】 ～働くシングルマザーとこども支援～

登壇者：かわさきみちこさん（シングルマザー、リンパケアセラピスト）、藤下品子さん（NPO法人泉の会代表）、平井祐子さん（こどもっ家スタッフ）

コーディネーター：野澤和弘さん（毎日新聞論説委員）





会場参加者の質疑・議論

コーディネーター：野澤和弘さん（毎日新聞論説委員）

最後に、本日の内容を踏まえて、会場全体で質疑応答と議論を行った。

3. 実施日時

平成 31 年 1 月 26 日（土）13:30～16:50

4. 実施場所

静岡市民文化会館 第 5・6 会議室

5. 対象者

興味・関心のある方ならどなたでも

6. 参加人数

54 人（スタッフ・ゲスト含む）

【第 3 部】 ～社会的養護とこども支援のいまとこれから～

登壇者：坂間多加志さん（ふじ虹の会、静岡里親会会長）、川口正義さん（寺子屋お～ぷん・どあ代表）

コーディネーター：野澤和弘さん（毎日新聞論説委員）



7. 事業の成果

【第1部】

生活困窮のシングルマザーのもとに生まれ、社会的養護を経験し、セクシャルマイノリティとして生きてきたAさんのライフストーリーをお話ししていただいた。

(要旨)

「最初、なんの当事者として話せばいいかわからなかったが、なんの当事者かは、聞いていただいたみなさんに判断してもらいたい」と静かに語り始めたAさんの半生に耳を傾けた。

幼少期から虐待を受け、最初の記憶も、母に虐待を受けたときのものであること。「自分が怒られるのは自分が悪いからだと思っていた」

「幸せな家庭をもちたいという夢がずっとあったが、セクシャルマイノリティであることに気づき、夢をあきらめないといけなくなると思った、人の営みから外れてしまったような気がした」

「ごはんはポテトチップスで、耐えられなくなって万引きを始めた」

「電気もガスも水道もとまった。学校にもたまにしか行かなかったが、電話がとまっていて学校からの電話も来なかった」

「定時制の高校に通った4年間は、似た境遇の友人がたくさんいて、先生もいろんな生徒を見てきていて、とても楽しかった」

「いまもなんとか生活しているけど、人並みの生活とは程遠い、余裕のない生活が続いている」

その後、静岡大学の白井教授を交えながら、会場参加者も含めて質疑応答を行った。

どうして子どもの頃、助けてといえなかったのか。

「小学生のころに、助けてくれようとした人の行動の結果、母親にぼこぼこにされて、あ、助けてって言っちゃダメなんだって思った」

「母をどうやったら殺せるか、医学書とかを読ん

ですごくいっぱい勉強した。でも、殺せなかった。決してやさしさからではなく、母への恐怖で。隠していたバイトの給料を母に盗まれて、キレたが、それでもできなかった」



【第2部】

①シングルマザーとして3人の子どもを育て、現在子どもを持つママ向けのリンパケアサロン「REBORN」や、自然材料由来の料理を提供する「りぼん食堂」、ママ向けの成人教育など、様々な事業・取り組みを展開するかわさきみちこさんに、これまでの半生と、現在の様々な活動についてお話ししていただいた。

(スライド参照)

「母に、疲れたーと言えなかった、抱きしめてほしいと言えなかった」「Aさんが、簡単に頼りたいと言えないと話していたけど、頼れる、頼りたいといえる世の中にしたい」「おせっかいを焼いていけば、頼りたいといえる人が一人でも増えるかもしれない」。



②子どもたちの居場所として「こどもっ家」を運営する藤下さん、平井さんに、実際の取り組み内容と日々感じていらっしゃることをお話しいただいた。

(スライド参照)

藤下さん:「なぜ、『こどもっ家』をやっているか。舅の在宅介護の経験から、在宅介護の研究会をつくった。自主的な活動をしていると、「こういう人があるんだけど少し泊めてほしい」という人が生活困窮者の窓口から相談されることがたくさんあったので、お金がなかったり、家がなくなったりした人のためのハウスを作った。そこには20代から60代までいろんな年代の人がいたけれど、みんな、親に捨てられた、たらいまわしにされたって。やっぱり、子どもたちの育ち方が大事なんだって、子どもに頼りにされる場を作ろうと思った。」

平井さん:「共働きのおうちが増えて、一人でいる子どもが多いとか、転勤したばかりで友達が欲しいとか、学校に行きたがらないんだよとか、椅子に座ってられないとか、いろいろな声があって、こんな場所が欲しいなと思って、始めました。」

「去年は1年生で『1人での不安だよ』って言ってた女の子が、2年生になって新人の1年生を連れて帰ってきた」

「『ママ以外の人の前で初めて音読した』と、ママが驚く」

「高校生がきて、男の子たちが喜ぶ」

「1年生の子が、幼稚園さんの隣で、お兄さんになって遊んでくれている」

「みんなで公園に遊びに行って、大縄跳びに入れない子をじいじがビシバシ指導する」

「1年生が遊具に乗ろうとすると、お兄さんお姉さんたちが縄をおさえてくれる」

「子供たちが街の中でいろんな人に出会う場をつくりたかった」

「おうちではなかなかできない経験をしたいな」

「親御さんが知らない、子どもたちの本当にた

くさんのいいところを、例えば誰かがものを落としたら駆け寄ってきてくれる子、そういうところを、子どもたちの生活を見守りながら、(親御さんやワーカーに) 伝えたりして」

この後、コーディネーターの野澤和弘さんをお話伺った。

「昔は、こういう場所がたくさんあった。Aさんや、みなさんのお話を聞いて、やっぱり親だけではやっていけない。親は子を、子も親を一番好きなはずだと思うのだけど、密室においておくとなぜか傷つけあってしまう」

「いろいろな場がなくなってきている。だから、REBORNの活動や、こどもっ家の活動が大事」
「間に1枚入れると、やわらかくなる。その1枚になればいい。」

「私も1人ぼっちは嫌なのだなと思った。1人ぼっちにならないように声をかけていきたい」



【第3部】

①自身も里親として2人の子どもを育てている坂間多加志さんに、社会的養護の現状について伺った。

日本の委託率は、児童養護施設8割、グループホーム1割、里親1割。里親制度は国によって違うので単純には比較できないが、日本の里親委託率は12%で諸外国と比べるととても低く、子どもの人権侵害だと世界中から言われて

いる。よく言われるのは、文化が違うとか、宗教が違うとか、だから仕方ないといわれるが、同じ日本でも静岡市は里親委託率が日本でも有数の高さだが、隣の富士市は県内でも委託率が低い。隣の市で文化や宗教が違うのか。もっと真剣に考えて取り組むべきことがある。

富士市の里親会、ふじ虹の会。「里親が参加できるようにしよう。」「里親に情報が届くようにしよう。」という思いがあった。施設職員は知っている、施設から里親に情報が伝達される機会はなかなかなかった。やっている人がちゃんと情報をつかめるように、関係機関と交流したり、一緒にフォーラムを開催したり、活動が広がってくるといろんな市民団体が参加してくれたり…そういったつながりの中で市民に里親のことが知られていくのって大事で、いろいろな子どもたちのこと、そこでしか知りえないこと、もっとオープンにしようと活動している。

目指すところは、里親や施設のいない社会。里親同士が仲よくすればいいとか、里親と子どもが楽しければいいということではなく、「地域開発」「ナチュラルサポートの形成」。地域社会にナチュラルサポートをいかに生み出していくか。里親も市民も福祉の専門家も、当事者の抱える課題を当事者や地域のエンパワメントに向けたい。地域に根差した地域開発、地域に根差した子どもの支援、地域に根差したファミリーサポート。

児童福祉はいまだに行政が制度をつくり、福祉が運用し、当事者が引っ張られる感じ。目指すところは、当事者が前に行く、本人たちの思いがあってそれを支える福祉がある、そんなカタチです。

あと、昨年、「児童養護施設におけるLGBTに関する調査報告書」にコラムを書きました。昔と今で子どものタイプが違う、今は複雑になったってよく言われるんだけど、なんで僕たちはこういったことを議論してるんだろう。僕も児童養護施設の職員をやり、地域の人とかかわり、

里親やり、いままでであった人たちで一人として同じ人はいないのに、なぜいま多様性を認めようとし、多様性を受け入れる可否を議論しているのか。ぼくたちはひょっとしたら多様性と口では言いながら固く縛られていて、ふつうを求めているのではないか。多様な児童という言い方がおかしいし、すべての児童を受け入れるのは不可能ではないのに、それをできなくしているのは大人なんじゃないか。



②寺子屋お〜ぷん・どあ等の取り組みで、生活困窮家庭、不登校、その他のたくさん子どもと向き合ってきた川口正義さんのお話を伺った。

「人生いろいろ、家族もいろいろ」

いろいろな人に出会った。もう殺された子もいる。

定型的な人の生き方なんてあるのだろうか。理屈なんてなくてもいい。生きてさえいれば。子どもたちに生きていてほしいと思いながら。バラバラに線路に散らばった子どもの身体を拾いたくはない。生きていればいい。

講演会でママたちに「我が子にひとつだけ何か贈る。伝えるなら何を伝えたいか」と問う。みなさんはどう考えますか。

当事者に対してこれだけはやっちゃいけないんじゃないかなあと思うことがある。子どもの居場所をつくりたい、大人がここは居場所だと思う、それはもはや子どもの居場所ではない。

あとひとつ。子どもをいじくらない。大人は子

どもをいじくりたがる。支援を通じていじくる。いじくらないためにどうできるのか。

他者の思惑に左右されない。一人称でものを考え、一人称でものを語る。学校に連れ戻したいという思惑、それに揺さぶられない。自分の軸足がどこかということがやっぱり問われるんですよね。



会場参加者の質疑・議論

・ Aさんは子どものとき、誰からどんなことをされたかったか。

「大人になってから思えば、無理矢理にでも介入してほしかったと思う。子どものころは絶対に知られたくなかった。必死に隠していた。僕の家の人たちも気づいていたと思う。でも、やっぱり他人の家庭に介入しないっていうのがありますよね。」

・ 介入するにも、アプローチするにも、自分がやることって裏目に出ることもあって、絶対的なことはない。状況も多様で。絶対的によくすることは人間にはできない。考え抜いてやるしかない。

・ 不適切な生活環境かなと思う子はいて、親との関わりでどうしたらいいのかと思ってきたけど、余計わからなくなってきた。

・ 親の支援も大事だと思う。これだけは変わらないというのは、親の都合は子どもには関係ない。親御さんがつらいから許してあげてよと子どもにいうのは違うと思う。

・ 命ってなんなのか。本当に奇跡のようなもの。
・ よく生まれてきてくれて、そしてよく生き抜いてくれてありがとうという気持ち。この先を言っていていいか悩んでいた。お産の現場にいると、どのお子さんにも、どの命にも母親が一瞬でも命をかけて産んでいることを目の当たりにしている。お母さんたちはものすごい苦しみを経て産んでいることを知っている。だからといって Aさんに押し付けるわけではない。現場ではそのときの状況によって当事者が入れ替わる。大事なのは、最終的にどこに帰属しようとしていて、喧嘩しないためにどうするか、それを見抜いていくこと。お母さんが一瞬でも命に代えて産んだ、それに見合うように育てられていて、ありがとうという気持ちです。

・ 誰かの声、悲鳴が聞こえたときにどうするか。関わるにしろ、関わらないにしろ、コミットすることによって状況を変えてしまう。自分の人生として目の前の状況にどう向かうのかを考えなければいけない。自分のこととして考えるというのを基本にしてやっていけたらいいのかなあ。

